

2回目の潜水合同調査

北川漁協と大分県企業局

昨年12月に北川ダム湖などで魚が大量死したことを受けて、北川漁業協同組合(長瀬二丁目組合)とダムを管理する大分県企業局はこのほど、北川の本流と支流の5カ所で今年2回目となる潜水調査を行った。

調査は、本流の白石、八戸、堀切地区、下赤タム下流の4カ所と、比較するために支流・小川の1カ所の計5カ所で実施。魚種や数量、河床の

状況などを同漁協の組合員が潜って確認。「延岡マリンサービス」の高橋勝栄代表が水中撮影を行い、状況を記録した。

この日は、激しい降雨や時折、雷が鳴り響く天候だったが、ウエットスーツを着用して潜水。視界は悪かったものの、白石、八戸、堀切地区のいずれも第1回調査(5月30日)に比べてウグイやオイカワなど小魚の姿が多くなっているのを確認

した。禁漁保護区になっている下赤タム下流は、6月19日にアユの放流を行った効果かもしれないが「ユがたくさんいた」と表情を緩めていた。

また、同ポイントで前回確認された泥の塊がなくなっていることについては、同ダムが7月22日に最大放流量172秒を記録していることから「出水によってフラッシングされた」と推測。ダムの放水によって良くも悪くも河川状況が変化することを再確認した。

「調査に同行した同局工務課の高見有矢主任は「河川の状況を知り、共通理解を深めることができた。企業局が何をでき

るかの考え、今後についても話し合ってきた」と話した。

昨年12月、北川ダム湖ではコイ科のモツゴやハスなどが、下赤タム湖下流や北川町八戸周辺ではアユやボウズハゼなどが大量に死んでいるのが見つかつた。大分企業局は調査の結果、酸欠が原因

であるとして推定している。潜水調査は、大量死に伴い今年5月に第1回調査を実施した。



潜水調査を行う北川漁協の組合員ら(北川町)

今回の調査の結果、「魚が大量死した状況から少しではあるが復元しつつある」と報告。今後は、下赤タム下流のみで発見された「川底の石に付着している藻」の解析を進めることや、来年以降も年に2回、梅雨時期の前後に潜水調査を行うことなどを話し合った。

長瀬組合長は、「企業局と合同で行うことに意味がある。調査を記録することで空論ではなく現実

であるとして推定している。潜水調査は、大量死に伴い今年5月に第1回調査を実施した。